

『後撰集新抄』翻刻（十）

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō*(X) _____

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankō-kai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67, 68, 70, 71, 72, 76, 77 and 81 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III, IV, V, VI, VII, VIII, IX and X. For this issue I have transcribed volume XI.

後撰集新抄卷 十一 (外題)

後撰和歌集卷第十一新抄

恋歌三

女のもとにつかはしける

三條右大臣

七二 なにしおは、あふ坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

○契沖法師の百人一首改観抄には、さねはまことなり。真貞誠信の字をさねとよむなり。よりてまことの葛カヅの心にいひかけたなり。女の男によること、葛のものにかゝりはふに似たれば、多く女にたとふ。しげりてはひあへば、それを女のならひ、かならず男にあふものなるによせて、逢坂山のさねかづらといへり。初の五文字、名によするかたならで、誠の逢坂、誠のさねかづらの上にいふにはあらず。都鳥にむかひて、名にしおは、いざ事とはんとよめるには同じからず。よこまよく思ひわくべし。人にしられどとは、人に知られずしてなり。くるよしもがなとは、来る由とよする心はなし。たゞ繰よしなり。索性集に、「音にのみならしの岡のさねかづら人しらずこそくらまほしけれ、是同じ心なり。くらまほしけれといへるにて知るべしと見え、縣居ノ翁の、百人一首うひまなびには、女のもとにゆきて、相寝て、しかも人にはし

られずして、かへりこん^ナ為かたもあれかしといふなり。初句は、万葉に名に負と書たり。さて、相坂のあふ、さねかづらのさ寝、且かづらは、くるといふ言縁もあれば、かたぐその名に其事を負てあらばといふなり。さねかづらは、さ宿^ホといひかけて、さは歌の心をいふ時は、発語の如し、云々。或説に、素性集に、「音にのみならしの岡の云々といふ歌によりて、此くるよしもがなも、くりよする義にて、此(二)女をわが物にするよしもがなと、いふ心なりといへり。今按に後撰集恋に、女のもとにまかりたるに、はやくかへりねとのみいひければ、「つれなきもおもひしのぶのさねかづらははてはくるをもいとふなりけり。是は来ることにいひよせたり。つゞけがらさまくなるものなれば、素性集の歌になづむべからず。今も来る心とせんぞやすかるべきと見えたり。されども、此説々今少しさまくにくだくしき事まじりて、立がたきさまに聞ゆるなり。師翁云、契沖のさねかづらの説、おだやかならず。真貞誠信などいふ事こゝに要なし。まことの逢坂、まことのさねかづら、云々などいふこと、まぎらはしきいひざまなり。又都鳥にむかひて云々という事も、くだくしく聞ゆ。素性集の、「音にのみならしの岡の云々」といふ歌を證例として、來の意には(三)オあらず、繰の意なりとの説は、まことによくいはれたる説なり。縣居翁の説、すべてまぎらはしく聞ゆ。そもく此歌の意、まづ、名にしおはばといふは、名に負であるが如くならばといふ事なり。俗にいはず、名に付であるその通りならばといふ事なり。さてその名にしおはばといふ語勢、次の逢坂山^{ウヅマ}のといふ句へは係らずして、三ノ句の切ル所へつよくかりて、さねかづらといふ語へかゝれるなり。「名にしおはば(い)ざ(い)こと、はん都鳥と。さねかづらの、さねといふ言へかゝれりといふは、さねとは、なにぬねのとかよひて、なよくとなびくことなり。万葉十四ノ八丁、「いはるまらのおほはるかほらのはるづらひかばぬるくわになたえそね。打なびいふも、専ら都鳥へかゝれるなり。同二ノ十六丁、「たげはぬれたかねば長き縁が髪云々とある。此ぬれもなびく事なり。」打なびく事を名に負である蔓^{カヅラ}と見るなり。且逢坂山とて、逢といふ事もある山の、此かづらを打なびかせ、引

よす(ニウ)るが如く、女に承引せさするよしもがなといふなり。人しれずと云句は、さらにとくまでもなく聞ゆる詞なり。一首の意は、逢坂山の逢といふ山のさねかづらの、その名に負てある如く、打なびく物ならば、人にしられず、心やすくながかせうけひかしむるよしもがなとなり。又一説あり。名にしおはゞといふ語は、逢坂の逢といふ言のみにか、れり。さて又その逢といふ言は、一首につらぬきて、結句までに及ぶなり。くるよしもがなは、全くくらまほしけれと同意にて、蔓を引よするをいふ語にて、畢竟は、女を得まほしく思ふ詞なり。かくて、一首の意は、逢といふ名に付てある逢坂山の蔓を、引よすればより来るが如くに、女を引よせ、我物にして、人にしられずして、逢ふよしもがなとなり。此説にては、さねかづらの語にはか、はらず(三三)、心得べし。件の両説のうち、人々の好むによるべきなりと、いはれたり。此歌を、百人一首峰のかけ橋に、訳したるは、もとより改観抄、うひまなびなどに、よりたるなれば、くだくしきさまなり。美石もまた一説あり。猶よく考へて、別記に記すべきなり。さねかづらは、和名抄、五味、佐林加豆良、とあり。俗にピナンガツラといふ物なり。名におふといふ詞の事は、上卷下巻廿六丁に委しくいへり。

ありはらのもとかた

七三

こひしとはさらにもいはじしたひものとけんを人はそれとしらなん

○君を恋しとは、改めていふにも及はじ。君の下紐は解るにてあらん。其下紐のとくるにて、我が恋るをは知給へかしとなり。人に恋らるれば、下紐の解るといふは、古くよりの諺なり。(三三)

返し

よみ人しらす

三三

したひものしるしもするもとけなくにかたるがごとはあらずも有かな
かけずそ有べき 六帖

○其しるしとすべき下紐もとけねば、のたまふ詞とは大に違ふことかなといふなり。末句、伊勢物語にはこひすぞあるべきとありて、此方よく聞えはすれども、又本書の、あらずもあるかなの方も、意は深く聞ゆるなり。異本の、あらんとはあるは、よろしかるべくもおもはれず。

女のいとおもひはなれていふに、ひけるに 又ノ一本つかはしける

三四

うつ、にもはかなき事のわびしきはねなくに夢とおもふなりけり

○逢見ても、君がつらければ、打とけたる事もなくて、はかなきことの難義なるは、寝ざるうつ、に、夢ぞと思ふ事なるよなといふなり。上四オ恋一に、「うつ、にもはかなき事のあやしきはねなくにゆめの見ゆるなりけりとあるに、大かた同じけれど、いひ方違へり。

みやづかへする女の、し侍ける 又ノ一本あひがたく侍けるに

三五

たむけせぬ別する身のわびしきは人めをたびと思ふなりけり

○みやづかへ人なれば、をりくは逢がたきなり。初句の、手向せぬは、旅にてなきといはんが如し。手向をする旅路へ別れ行て、久しく逢はれざるは、其はつツの事なるが、我は旅路の別をして、旅に居る身にもなきに、かやうに久しく逢はれざる事のわびしきは、人目を憚ハカての事なり。人目故にかく逢はれね

ば、人目を旅ぞと思ふなるよといふなり。人目を旅といふ詞は、人目堤、人目の関、などいふに、似たる
(四二) いひなしなり。

かりそめなる所に侍ける女に、心かはりにける男の、こゝにては、かくびんなきところなれば、心ざし
はありながらなんえたちよらぬといへりければ、所をかへて侍けるに、見えざりければ

※つかね備云、かりそめなる所に侍けるころ、心かはりにける男の、こゝはかくびんなき所なれば、
心ざしは有ながらなんえ立よらぬといへりければ、所をかへてまちけるに見えざりければ。

○かりそめなる所に侍けるとは、定りたる家にはなく、たゞかりにしばらく移住たるにて、夕
顔ノ上の五条の家などの類なるべし。よりにて、こゝにてはかくびんなき所なればといへるなるべし。
びんなきは無便にて、たよりわろきなり。

女

志天 宿かへてまつにも見えすなりぬればつらき所のおほくもあるかな

○居所をかへよかしにの給ひしゆゑに、家をかへて侍て居ても、や(五)きはり、訪ひ来もし給はねば、我
が身のためには、君の来給はぬつらき場所が、多くある事かなと云て、何所にも訪ひ給はぬは、所から
にてはなし。君の心のつらきなりといふをふくめたるなり。六帖、「山里もおなじうき世の中なれば所か
へてもすみうかりけり。信明集、「ありしよりつらき所もまさらなんかひなきよりはたえてやみなむ。

だいしらす

よみ人しらすも抄

志七 思はんとたのめし人はかはらじをとはれぬ我やあらぬなるらん

○いつまでも、かはらず思はんと、我に頼に思はせし人は、其をりの通りに、心のかはり給ふ事はあらじを、かやうに訪おとづれもなくなりたるは、是はかくとはれぬやうになりたる我身が、もとの我身にて五ウはなくて、あらぬものになりたるにやといふなり。我やあらぬなるらんとは、我身がもとの我身にてはなきやらんといふ意なり。上恋二思はんとたのめし人はありときくいひし言の葉いづちいにけん。

源さねあきら、おもふことならずは 集 たのむ事なくはしぬべしといへりければ

中務

七六

いたづらにたびくしぬといふればあふには何をかへんとすらん

ことにしぬといへば 中務集

なるは 六帖

○命をは、逢ふにこそかふべけれ、君はさもなきに、いつでも沢山タケサツげに、死るくとのたまふ様子なれば、さやうにては逢には何をかへ給ふぞ、あふにかふるほどの大事の物は侍らじとなり。

返し

源信明

七五

しぬくときくだにもあひ見ねば命をいつのよにかのこさん六帖 又ノ一本 (六オ)

○君は、死ぬるくといふ事を聞ながら、やはり逢見給はねば、とても命にかへて逢ふ時節はあらじ。さらば、いつの世の何のためにとてか、命をもをしてみて残さんとなり。きくくだにもは、俗言にいはゞ、聞テキ、又イテ居テサヘモ、といはんが如し。あひ見ねばは、かなたより逢はねばといふ意なり。

ときく見えけるをとこの、ゐる所のさうじに、とりのかたをかきつけて侍ければ、あたりにおしつけ

侍ける

○つかね緒云、此詞書、男のゐる所とは、此歌をよみたる時、此男の居たる所をさしていへるにて、侍従がつかへ居る、本院の内なるべし。さうじは障子なり。曹司といへる説はひがことなり。かきつけて侍とは、たゞ書てある事歟。然らば、つけ（云々）てといふ事いかゞなり。書て侍ければこそいふべけれ。もし又、つけてといふに意あるか。そはさだかならず。今思ふにかきつけてとは、障子へやがて画たるにはあらて、戯ごとなどの如く、色紙などへ仮初に画て、障子に貼（か）つけたるにもあるべし。

本院侍従

七〇 系にかける鳥とも人を見てしかなおなじ所をつねにとふべく

○絵にかきたる鳥は、はかなき物なれども、我が思ふ人を、此画の鳥の如くにもして見たきものなり。さもあらば、他の所へは行給はずに、常々此所にのみ居給ふやうにといふなり。絵に画たる鳥は、外へは行かぬ物なればなり。末句は男の訪（ト）ふと、鳥の飛（ト）ぶとをかねたり。（モオ）

大納言国経朝臣の家に侍ける女に、平定文いとしのびてかたらひ侍て、ゆくすゑまでちぎり侍ける比、（る事侍けるを風林抄）
この女、にはかに贈太政大臣の家風林。にむかへられて、わたり侍にければ、ふみだにもかよはすかたなくなりにければ、かの女の子のいつ、ばかりなるが、本院の西のたいにあそび（せうそこを）ありきけるを、よびよせて、母に見せ奉れとて、かひなにかきつけ侍ける

○贈太政大臣は、左大臣時平ノ公の事なり。本院は、即其家なり。拾芥抄に、中ノ御門ノ北、堀河ノ

東一町、左大臣時平ノ家と見えたり。にしのたいは、西の対なり。かひなは、腕なり。此詞書なる平定文といふ事は、除くべきよし、つかね緒に見えたり。作者のみづからの名なればなり。然れども、此類の詞書は、撰者のか（モウ）かれたるふりにて、古今集などの、作者のみづから、かきたるふりとは違へる事多くあるは、此集の例なり。

平定文

七二　むかしせし我兼言のかなしきはいかに契しなごりなるらん

○昔いかに契しなごりにて、今かく悲しき目にあふ事ぞ、そのかみはかくうき中にはならじとこそ契しを、といふ意にて、二三ノ句は、かねごとの悲しくなりたるは、といふ事と聞ゆ。かね言とは、本妻にといふやうに、豫カキて契たる言をいふなり。鞆トウがね、后キタキがねなどいふ詞を以てさるとるべし。さて、彼女の子といふは、即ち定文ノ朝臣の子なれば、なごりといふも、此子をさしていへるなり。

返し

よみ人しらず（八オ）

七三　うつ、にてたれ契けむさだめなき夢ちにまよふわれはわれかは

○昔契しも、今かくなれるも、すべて夢路に迷ふこゝちにて、我ながら、我とも覚えず、うつ、心とも侍らぬを、昔せしかね言のなごりなどのたまふは、誰人ぞ、さる事のためは、うつ、にて契給ひし人になり。

おほやけづかひにて東のかたへまかりけるほどに、はじめて相しりて侍る女に、かくやん事なき道なれ

七三

くればとりあやに恋しかばふたむら山もこえずなりにき

○くればとりは、歌の表にては、あやにといはん料のみなり。あやには、俗言に、アンマリニといはんが

ば、心にもあらずまかりぬるなど申て、くだり侍けるを、後にあらためさだめらるゝことありて、めしかへされければ、この女きゝて、よろこびながらとひにつかはしたりければ、みちにて人の心ざしおくりて侍ける、くればとりといふあやを、ふたむらつゝみてつかはしける(八〇)

○やむ事なき道なれば、なほざりにならぬ、公事の道だちなればといふ事なり。すべて物へ行くをさして、道といへる事、古事記伝ノ十四万葉六などにもありて、古今集に、「人やりの道ならなく」といへるたぐひ、歌にも、詞書にも多かり。漢文に、此行など云、行ノ字にあたれるよしなど、鈴屋ノ大人配佐にいはれたり。よろこびながらは、帰來たるをよろこびて、早速サツソクにとひにおこせたるなり。打捨おかずに、早々と云意なり。くればとりといふあやは、延喜式主計上云、上総国、呉服ハトリノケ綾、同遠江国、呉服綾、白二十疋、赤十五疋、など見えて、袖中抄にくればとりのあやといふにつきて、さまざまに注せらる。延喜式にてことされたればいたづらになれりと契沖法師いはれたり。(九)呉服は、綾の名なる事、明らかなり。くればとりは、もと呉の国より来りしはたおりのことなるを、すなはち、綾の名にいひなしたるなれば、はとりのとをすみてよむべきよし、縣居ノ大人いはれたり。ふたむらは、二匹なり。匹も、端も、ともにむらと訓めども、此所なるは匹の方なり。拾芥抄に、和銅七年、官符、絹絶ハ、六丈ヲ為レ匹。調布ハ、四丈二尺ヲ為レ端。云々などあるによるべければなり。

清原諸実

如し。余アツリに恋しかりしゆゑに中途よ九ウリり帰たりといふを、彼綾二匹にそへて、よめるなり。二村山は、冠辞考に、和名抄に、尾張ノ国岡村、布多とあり。詞花集には、參河ノ国の二村とかけり。もしは国の境などにおいて、かなたこなたにわたる故にやとあり。詞花集秋、むさしの国よりのほり侍けるに、三河ノ国二むら山の紅葉を見てよめる、橋能元、「いくらとも見えぬ紅葉の錦かな誰二むらの山といひけん。

返し

よみ人しらす

七四 から衣たつををしみし心こそふたむら山のせきとなりけめ

○君の旅立給ふを、をしみたる我が心こそ、二村あたりの関とはなりて止め參らせつらめ。それ故に、君は二村山をこえずに帰給ひしと見ゆとなり。二村山の関といふ事、脚考たる。(十オ) 説もあれど別記に記すべし。

人のもとにつかはしける

の異
きよなりが女

七五 夢かともおもふべけれどおほつかなぬぬに見しかばわきぞかねつる

○逢見しほどのはかなかりし事をば、夢かとも思ふべけれど、寝たるには侍らず。さらば、寝ぬに夢を見るべきにもあらねば、とにかくにおほつかなくて、夢うつ、ともわきかね侍る事よとなり。古今の、「夢かうつ、か寝てか覚てかと、同じ心ばへなり。拾遺恋、「夢かとも思ふべけれどねやはせし何ぞ心に忘かたきは。

実抄本一本同
少将真忠、かよひ侍ける所をさりて、こと女につきてそれよりかすがの使に出たちてまかりければ、つかは

しける 異

○春日ノ祭は、二月ノ上の申ノ日なり。末ノ日に使は立らる。其使は、近衛の中少将、つとめらる、よしなり。大凡のさまは、公事根源等(十)にも見えたり。

もとの女

七六 空しらぬ雨にもぬる、我身かなみかさの山をよそにき、つ、

○空しらぬは、貫之集下、春源といふだいとく、桜の花をうす紙につ、みて、「空しらぬ雪かと人のいふときく桜のふるは風にざりける。共に空にしられぬに同じと、契沖法師もいはれたり。一首の意は、今度、春日の使に出たち給ふ、少将の君は、此頃にては、よその人になり給ひたれば、天からふる雨にてはなく、空にしられぬ、我が涙の雨に常々濡て居る事かなとにて、笠をよそにきく故に、涙の雨にぬる、事よといふなり。こは、大中少将の官をば、三笠山と異名する故に、少将のよそになり給へるを、三笠の山をよそに聞つ、といへるな(十一)まり。拾遺雜貫、おなし少将、かよひ侍ける所に、兵部卿致平ノみこ、まかりて、少将の君おはしたりといはせ侍けるを、後に聞て、かのみこのもとにつかはしける、「あやしくも我ぬれ衣をきたるかなみかさの山を人かられて。かくて、兵衛を柏木、大中少将を、三笠山と異名する事は、後撰拾遺等の歌に、はじまれるよしは、顕昭法橋も契沖阿闍梨も、くはしくははれたり。さていかで、かくは異名につけたりけん。そのよしはいまだえ考へず。

あさがほの花まへにありけるさうしより、をとこの、あけていで侍けるに

○ざうしは曹司なり。あけては夜明ての事と聞ゆ。此詞書朝忠集には、たいふがもとより、曙に出
てとあり。千二ウ

よみ人しらす

七七

もろともをるともなしに打とけてみえにけるかな朝やしめらん 朝忠集がほの花

○抄に折よみを居るにそへてなり。或抄云我と、もにも居ぬに、うちとけ姿に見えしよとなりとあるが如し。
朝忠集にては男の歌、此集にては女の歌なり。こは女の歌と聞ゆるなり。初二ノ句に、常に諸共に居ざる
をなげく意こもりて聞ゆればなり。末句は、花の名を人の朝出の容貌にそへたる事、夕顔巻の「よりてこ
そそれかとも見めたそかれにほのく見つる花の夕顔、などに同じ。

内にまゐりて、ひさしうおとせざりけるをとこに

○内うちは、禁中なり。禁中あたりといふ事を、内うちわたりと云。禁中より他へ退出るを、内よりまかん
出といへるたぐひ、常のこと(十二)にて、源氏物語などにも、いと多くあり。

をんなつかねに、此作者のをんなとあるをば、除くへきよし見えて云、をとこと一方をいへば、一方は女といはても女と聞え、女と一方をいへば、一方は男といはても、をとこと
聞ゆるなり。すべて
此例なりとあり。

七八

も、しきはをの、えくたす山なれや入にし人の音づれもせぬ

○抄云、晋ノ王質山に入て、仙人の碁を見るうちに、斧の柄朽たり。さて故郷に帰れば、七世の孫に逢し
事あり。彼男の久しく内裏に在しを、王質が山に在しに准へいへり。も、しきは、大宮の枕詞なるを、や
かて、内裏の事にいへる事、上夏部に、「なつの夜は逢ふ名のみしてしきたへのちり払ふ間に明ぞしにける

と、あるなど、同例なり。猶かしこにいへる事をも見合すべし。くたすはウチシム命クタクス朽なり。(十二ウ)

女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて

伊尹朝臣

七九 すか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人や見るらん

○鈴鹿山伊勢をとつゝきたるつゝき、いぶかしきことなり。いせをのをもじも心得がたしと、鈴屋ノ大人いはれたり。此詞説々あれども、いづれも考へ得たりとは思はれず。猶然るべく覚ゆる説もあらんには、追考に記すべし。すて衣は、とるにたらぬ見ぐるしき衣といふ意なるべし。海人の海に入る時にぬぎ置などいふは、委しきに過てかへりてわるしと、師翁いはれたり。一首の意は明らけし。

七〇

いかで我ひともとはん暁のあかぬ別やなに、似たりと又ノ一本 (十三オ)

貫之

○人にもとはんとは、我心に不審に思ひあまれる事を、かくいふなり。そのうちに、人とは同じく別をする女をさしていふ心ばへなり。暁のあかぬ別は、実に似るものもなく、悲し事に我は思ふなるが、もしこれに似たるものもありや。いかで人にもとひ試んと云なり。さて君もさやうに思はるゝにてあらんと云意をこめたるなり。此歌のてにをは、何と云て、たりと結びたるは、何なり難なりなど、同じ例なり。詞の玉穂二の卷十一兼以下に見えたる、変格におなじ。

行 二本

在原業平朝臣

七三 恋しきさ一本に消かへりつ、朝露のけさはおきみんこけ 又ノ一本 たにせず 六帖、ちこそせね

○一首の意は明らかかなり。消かへりは心の消入る意を強くいへるなり。死かへり、わかかへり、などいふかへりに同じ。おきみんも露の縁言なり。(十三ウ)

よみ人しらす

七三 しす 又ノ一本の、めにあかで別し袂をぞ露やわけしとひとのがむる

○涙に深くぬれたる袖を、朝露をわけたりやと、人の見とがむるよとなり。古今悉三、「秋の野にさ、わけし朝の袖よりもあはで来し夜ぞひぢまさりける。此歌は、てにをほの結ニ重なり。三ノ句の、そは、末句のとがむるにて結び、其中間間に露やのやもしを、わけしとのしにて結びて、と、うけて、下へつゞけたるなり。末句人のを、人や人はなどある本は写誤なり。委し。くは、玉緒二の巻、七八のひらを見てわかまふべし。

平中興 なりけり 又ノ一本

七三 こひしきさも思ひこめつ、あるものを人にしらる、涙なみなになり

○恋しき事も、心におしこめくして、色にも出さで居るものを、涙のもれて、人にしらる、は、何事ぞとなり。何なりは、俗言に、ナンゾイナ、(十四オ) ナンヂヤゾイ、などいふに近く、咎むる心ばへなり。

此歌の末句も、変格なる事、上の何に似たりと同じ。何なるとある本もあれども、そは中々によろしからず。

からうじてあへりける女に、つ、む事侍て、又えあはず侍ければつかはしける

兼輔朝臣

三七四

あふさかの木の下露にぬれしよりわが衣ではいままかわかず

○さきに逢て別る、時に、涙にぬれたるが、其後はえあはねば、其あはぬをなげく涙にて、引つゝきて、
今も我袖はかわかずとなり。

だいしらず

みつね

三七五

君をおもふ心は六帖又ノ一本を人にこゆるぎのいその玉もやいままもからましや又ノ一本

○抄に、小余綾ノ磯、相模の小磯といふ所なり。人にこゆるは、人に過て思十四ふなり。為家抄義、玉も
をからんとは、君を得んととの心なりとあるが如し。玉藻は、磯にある物なれば、こゆるぎのいそのといふ
より、玉藻といひ下して、君に逢はんといふ意とせられたるものなり。玉といひ藻といふに、用ある事に
はあらず。さてこゆるぎの磯は、和名抄に、相模国、余綾郡奥呂木と有て、万葉十四にも、「相模ちの余呂伎呂」
の浜のとよみて、略解に、今の大磯駅の東うらのあたりなりと見えたり。風俗歌などにもよろぎとよめるか多し。然るを、ろをるに、
通はしていへるは、此集などの頃よりの事なり。下巻六、「とふ事をまつに月日はこゆるぎの磯にや出て今
は恨ん。

おやある女に、忍びてかよひけるを、をとこもしばしは人にしられじといひ侍ければ

※つかね種云、おやししのびて、をとこをかよはせけり
※るを、男もしはは人にしられじといひ侍ければ。

よみ人しらず (十五才)

三七六

なき名ぞと人にはいひてありぬべし心のとはいいかゝこたへん

○一首の意明らかなり。さてこは、恋の歌なる事は論もなければ、ことごとくしき教戒などの意に見るべきにはあらねど、猶人の真心を論はんたすけともなる事にて、ことに心して見るべき歌ともいふべし。故に、此下ノ句を常に心におかば、司馬温公に及ふべしと、契沖法師もいはれたり。

なき名たちけるころ

いせ

三七

きよけれど玉ならぬ身のわびしきはみがける物にいほぬなりけり

○はげみて潔白く身を持たれども、さやうには人のいはざるが、難義ものよとなり。

しのびてすみ侍ける女に、つかはしける (十五ウ)

敦忠朝臣

三六

逢ふ事をいざほに出なんしのず、き忍びはつべきものならなくに

○ほに出なんは、打出んと云意なり。かく君に逢ふ事を、今は打出て人にもしられん。終に忍び遂べき事ならぬにとなり。忍びはつべき云々は思ひの切なるをいふなり。しの薄は、いまだ穂に出ざるをいへば、忍び果べきとあるに、ことによしあり、花薄とあらんよりまさりさまに聞ゆるなり。

あひかたらひける人、これもかれもつ、む事ありて、はなれぬべく侍ければつかはしける

※つかね緒云、われももつ、む事ありて、
はなれぬべく侍ければ、つかはしける男

よみ人しらす

三三

○此詞書しどけなくて、あひかたらひける人といへる、人もちぢなきいひざまなり。歌も男のか女
のかわきまへがたし。今男（十六オ）といふ文字を加へたるは、女とも有べしと、つかね緒に見えたり。
は大和物語 あひみてもわかる、事のなかりせばかつくものはおもはざらまし

○かく逢見ても、別る、といふ事だになくは、今かく逢見て居るうちより、はやかたへには別ん事をなげ
く物思ひは、あらざるへきものをとなり。大和物語の、此歌の返しに、「いかなればかつく物を思ふら
んなごりもなくぞ我は悲しきとあり。かつくは、古今別「別てはほどをへだつと思へばやかつ見ながら
にかねて恋しき、とあるかつに同じ。一首の意もや、似たり。

人のもとより、あかつきにかへりて

閑院左大臣

三三

いつのまに恋しかるらんから衣ぬれにしそでのひるまばかりにを一本（十六ウ）

○ただ今ぬらしたる袖のかわかぬほどに、わかれて間もなきに、はやかく恋しきは、いつの間に恋しき事
ぞといひて、しばしがほども忘れざる意を、つよくのたまへるなり。末句は、をとある方まさるべし。
六帖、「いつの間に恋しかるらん朝露のけさこそおきてかへり来にしか。

貫之

三三

別つるほどもへなくにしら波の立かへりても見まくほしきかに異

○白波のは、たちかへりといはん料のみなり。一首の意は明らかなり。末句ほしきにとある本は、誤なる

へし。

女のもとにつかはしける

※つかね緒云、小野好古朝臣の女に遣しける。

これまさの朝臣

七三

人しれぬ身はいそげどもとしをへてなどこえがたきあふ坂の関(十七)宇治拾遺

○君には知られず、此方の心のみにて、早く逢見まほしく急げとも、年月を経ても、いかでかく逢はれぬことぞとなり。初句の人は、女をさしていふなり。かくばかり思ふを、君にしられずしてといふ意なり。

新古今(二)、つれなく侍ける女に、しはすのつごもりに遣しける、「あら玉の年にまかせて見るよりは我身ぞ越ん相坂の関。

返し

小野好古朝臣女

七三

東路に行かふ人にあらぬ身はいつかはこえんあふさかのせき

○上ノ句は、たゞかけ歌の相坂の関といふをうけていへるのみなり。東国へ往来をする身にもおはせねは、いつか相坂の関をは越え給はんといふのみなり。此贈答の事、宇治拾遺物語に、今は昔、一条摂政とは、東三条殿の兄におはします云々。やごとなくよき人の姫君(十七)のもとへ、おはしましたし初にけり。めのもと母などをかたらひて、父に知らせ給はぬほどに、聞つけて、いみじくはら立て、母をせため、つまはじきをして、いたくのたまひければ、さる事なしとあらがひて、まだしきよしの文かきてたべと、母のわび申

たりければ、「人しれず云々とてつかはしたりければ、父に見せければ、さてはそら言なりけりと思ひて、返し父のしける、「東路に云々とよみけるを見て、ほ、ゑまれけんかしと、御集にありと見えたり。

女のもとにつかはしける

藤原清正

言四

つれもなき人にまけじとせしほどに我もあだなは立ぞしにける

○君のつれなきに負じとて、猶いひよりなどせし程に、我も恋する人といふ名が立けるよとなり。あだ名とは、恋をする人といふ名の事(千八百)にて、古今の、「あやなくあだの名をやたちなんなどに同じ。玉葉恋」つれなしと見つ、つれなくしのお間に我もつれなき名にぞたちける。

かれがたになりけるをとこのもとに、さうぞくてうじておくれりけるに、かゝるからうときこ、ちなんするといへりければ

○さうぞくは、装束なり。てうじては、調じてなり。かゝるから云々は、カヤウニ他人メイタ、義理タテラスルカラ、ケツク疎々しい心チガサスルといふ意なり。

小野遠興がむすめ

言五

つらからぬ中にあるこそうとしといへへだてはて、しきぬにやはあらぬ

○抄に、したしき中には、衣をへだて、も、疎しと思ふべきに、我中は、隔(へま)果(ぐ)し中なれば、衣を隔といふまでもなしとなり。大概抄云、此歌、「衣だに中に有しはうとかりきあはぬ夜をさへ隔つるかな。此古歌を取とあるが如し。此衣だに云々の歌は、拾遺恋三に出たり。

果てしは、はてたりしなり。下ノ句は、もはやとくより、隔果^{ハキ}たりし中にては侍らずやといふ意にて、か、るから、うときこ、ちぞなどのたまふ、御かこつけこそ、いよくつられと云意をふくめたるなり。明石巻、「かたみにぞかふべかりける逢事の日数隔てん中の衣を、うつばあて言「あひも見て月日隔つる我中に衣ばかりを何うらみけん、「年月も衣も中には多くとも心ばかりはへだてざらん。

五節の所にて、閑院のおほいぎみにつかはしける（十九）

○五節とは、毎年新嘗会の時に行はる、事なり。童女四人^{或五}にて舞ふ。是を五節の舞といひ、此童女を、五節の舞姫といふなり。此舞妓は、公卿の家より二人、受領の家より二人奉る事なり。舞此

姫、やがてめしと、められて
宮仕たる例もあるなり大凡のさまをは公事根源、また建武年中行事略解などの文を、つまみていふべし。十一月ノ中ノ丑の日を、五節の帳台試といふ。常寧殿にて主上御覽あり。五節の舞姫は、五人^{或四}

人の内、一兩人参りの儀式あり。其外は内々参るを、暁参^{又暁}といふ。皆まゐりと、のほりて、帳台に出御あり。殿上人ども、脂燭^{シソウ}にさぶらふ。主上御直衣御指貫^{ナホシ}にて、御沓をめさる、事は、此時の外はなし。但シ御鞆^{類編}の時は、帳台ノ試に准じてめさる、なり。帳台におはしますのほど、（十九）乱舞あり。びんだ、らなどうたふ。大歌小歌などいふ事あり。寅の日は、殿上の淵醉^{チシキ}あり。朗詠今様など歌ひて、三こん^敵はてて、乱舞あり。次第に沓をはきて、女官の戸よりのぼりて、うへをへて、御湯殿のはざまより下において、北の陣をめぐり、五節所にむかふ。其後所々に参て、推参^{スエサン}などあり。鄂曲の輩^毎をしてまいたん^目などうたふ。后宮女院など淵醉^目あれば、けふあすのほどなり。けふ御前の試あり。御殿の廂^{ヒヤツ}にて乱舞あり。櫛などをかる。昔は年々に行はる。今は大嘗会の時より外

はなきにや。昔は狩ノ使などいふ事ありければ、けふ五節所にたまはらんために、文かた野のきじな
 どを召れしに、使の有しを、狩の使とは申也。卯ノ日は、童女御覽、清涼殿にめして御覽ず。わらは
(二十オ)をりに、いづれの時にか、御簾の下_{シモツカ}にめす。今夜_ヨ日_ニ卯新嘗の祭なり。辰の日、トヨク豊明の節
より髪をひき入れて、御覽せられけるとかや。
 会なり。新嘗に参たる、上卿宰相并弁_{ウヂ}小忌_{ウヂ}を着る。夜べは、諸司の小忌_{ウヂ}を束帯_{ウヂ}の上に着たるを、今日
 はうるはしく、青摺_{アヲスリ}を用ひ着る。上卿宰相外弁_{ウヂ}の上首_{ウヂ}をつとむ。南殿の廂に、元子_{コトシ}をまうけて、内
 弁以下座につく。シロキクノキ白酒黒酒の盃をとり、大歌所の別当、大歌もよほして、舞姫のほる。イヅツカ五度袖をカ
 してかへり入る。事にたへたる上達部_{カシヂヤ}、五節所をとぶらひて、催馬楽_{サイバク}などうたふ。云々今日辰の
 日の節会は、大嘗会の時は、辰ノ日を悠紀の節会、巳ノ日を主基_{ヌキ}の節会と申など見えたり。五節の
 起りは、統日本紀、第十五には、天平十五年五月、卯宴郡臣於内裏_{ウヂ}皇太子親舞_{マツカタ}二(二十ウ)五節_ウ一
云々とあり。是は天武天皇礼楽なくしては、世を治るに事足らざればとて、つくらせ給ふよしなり。
 又、江次第、頭書、河海抄などには、本朝月令を引て同じ_{即天武なり。}淨御原天皇。帝吉野に大まし／＼ける時に、
 天女あまくだりて、「をとめどもをとめさびすもから玉をたもとにまきてをとめさびすも、と歌ひて、
 五たび舞たるよりおこれるよし見えたり。本朝文粹、第二に、三善ノ清行の延喜十四年四月意見封事にも、
テスルニ重按_ニ旧記昔神女来舞_{フコト}未下_{ルコト}必有_ニ定数_ニ四五人_トと見えたり。か、れば、其始は、新嘗会とは
 異事なりけんかし。統紀にも、五月と見えたればなり。されど、清行の封事の中にも、伏見_{ルニ}朝家
 五節舞妓_ウ、大嘗会時五人、皆預_ル叙位_ニ、其後年々新嘗会四人、無_ル預_ル叙位_ニ之例_トと見えたれば、
 延喜_ニ二(二十オ)の頃となりては、必大嘗会新嘗会につきたる事となれる事明かなり。猶此五節の始などの事
卷二十四下に、委しくいはれ舞妓の数も定れる数は、なかりしさまは、天平十五年には、孝謙天皇いまだ皇
たるを必見るべきなり

太子にして、みづから舞はせ給へりといふにてしられたり。四人五人などあるによりておもふに、公事根源には、五人とあり。江次第の頭書には、五節所受領分二所、公卿分二所、以上四人也とありて、退出の条には、第一人第三人第二人第四人とあり。建武年中行事略解にも、四人と見えたるを、清行の封事の文に引合せて思へば、大嘗会には五人、新嘗会には四人といふ定にや有けん。大嘗会新嘗会とは、十一月中ノ卯日に、今年の新稲を、神に奉らせ給ふ義なり。御ニテ也代の始に行はる、をば、大嘗会といひ、毎年行はる、をば、新嘗会といふなり。大嘗会を、オホシベ、新嘗会を、ニヒナ書は、ニヒミアへなるを、音翌辰ノ日豊明の節会あり。豊の明は彼新稲を今日主上もきこしめし、臣下にも給便に転ひ唱へたるものなり。翌辰中ノ日豊明の節会あり。豊の明は彼新稲を今日主上もきこしめし、臣下にも給ふ饗宴なり。五節所とは、此舞妓の息所俗に云、休息などいはんが如くなるべし。此所にて、装をつくろひなどするさまなり。雲凶抄に、常寧殿に在るよし見え、江次第にも、常寧殿西、塗籠内、帳台上敷ニ長筵、其上可レ敷ニ舞姫座。其前各立ニ白木燈台一本ニ云々。殿内四角、各トニ五節所ニ云々。時尅五節舞姫参ニ入於玄輝門、下車公卿束帯相從。各入五節所有藝道。諸大夫四人、執ニ几帳角、殿上人付ニ童女、シカカヒ傳等ニ云々。など見えたり。かくて事にたへたる上達部、五節所をとぶらひて、催馬楽などうたニ千ニオふとも見え、又公卿束帯相從なども見えたれば、此庶尹ノ朝臣も、さるをりに、此歌よみかけられたるなるべし。なほ五節のをりのさまは、源氏物語、をとめの巻、又紫式部日記などを見ても、大かたには心得らる、なり。閑院ノ大君は宗子ノ女也と抄に見えたり。

もろまさの朝臣

三六 ときはなる日かげのかづらけふしこそ心の色にふかく見えけれ

○抄云、日蔭ヒカミのかづらとは、きつねをがせといふ草なり。一条の禅閣ノ御説に、辰の日の舞妓の装束、青

摺の唐衣、赤紐、日蔭ノ鬘等なり云々。一首の意は、君の頭にかゝりたる、日蔭の蔓カウラの青き色が、我が常々君を思ふ心と同じく、いつも変らぬ、ときはの色なるが、今日は顕ハれて、深きニヒクシ色の見ゆる事よ。それにて、我心をも推量オシハカ給へとなり。

返し

三七

誰となくかゝるおほみにふかゝらんいろをときはにかゝたのまむ

○抄に、僻按抄云、おほみとは、新嘗会ウラツヒにト合の人は、小忌コイミを着る、さなき人の例の束帯したるを、其夜は大忌オホイミの公卿といふ云々。愚按小忌とは、青摺とて、山藍ヤマアイにてする物を着クするを、小忌の王卿など、江次第にいへり。それは数定りたるに、其外に束帯したるを、大忌といひ習はして、数多あり。されば、此歌に、誰となくかゝるあふみに、あまたある中にては、一人をしも常磐の色とも頼がたしとなるへしと、見えたり。まづは比意なるべし。されど此説今少し心ゆかぬやうにも思はるれば、猶考ふべきなり。二十

三オ

藤つばの人々、月夜にありきけるを見て、ひとりがもとにつかはしける

○抄に、村上天皇の中宮ミヤ、九条ノ右大臣師輔ノ公の女、藤壺におはせしよし、栄花物語に有。

其御方の女房達の、月にありきしにやと見えたり。此詞書家集には、月夜に、しろき衣どものかぎりきたる女の、あまたいでゐたりけるひとりがもとにつとめてとあり。

清正

の悲しきは、我身なるよといふなるべし。

七四二

夢にだにまだ見えなくに恋しきはいつぢならへるこゝろなるらん

に異
ありはらの元方

○見ぬ恋の歌なり。四ノ句は、異本いつにの方然るべし。一首の意は、明らかなり。古今恋二、「世中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ二三四の人もこひしかりけり。

七四三

思ふてふ事をぞねたくねたくぞ六ふるしける君にのみこそいふべかりけれ

みぶのたゞみね

○思ふといふ事は、君にのみいふべき事にてありけるよ。さるを他の人にもいひふるしたるが、ねたき事ぞとなり。ねたくは、俗言に残念ニ、また口ヲシク、などいふに近く、後になりて惜み悔る意あり。

ふるしは、令旧フルンにて、旧く為たるなり。六帖、「思ふてふ事よりほかに又もがな君ひとりをはわきてしのばん。兼盛集、「思ふてふ事の世にだにふりざらば我がいへるとぞ君にいはまし。新勅撰恋三、「悲しきもあはれもたぐひ多かるを人にふるさぬ言の葉もがな。

七四四

あな恋し行てや見まし津の国の今もありてふうらのはつしま

紀の國に六帖

戒仙法師(二五五オ)

○昔見し人などの、津国のわたりに在アと聞て、よみてやりたるにもあらんか。抄にも、或抄云、津の国の

人を、浦ノ初島にそへて云なりと見えたり。古今悉四、「あな恋しいまも見てしか山がつの垣ほにさけるや
 まと撫子。浦ノ初島は抄に、為家抄云、きの国の浦ノ初島と近來よむか。六帖には、きの国に今もありて
 ふとありと見えて、新統古今冬に、大納言「紀の海や沖津波まの雲はれて雪にのこれる浦の初島、といふも
 見えたれば、六帖に、紀国とある方や然るべき。三句、津の国ののの詞は、四ノ句をへだて、末句へかゝる
 なり。此事主の巻、三の巻、十一のひらに、委しく見たり。

やんごとなき事によりて、遠き所にまかりて、た、ん月ばかりになん、まかりかへるべきといひて、ま
 かりくだりて、みちよりつか二十五ウはしける。

※つかね緒云、人をあひしりて待けるに、やむことなきことによりて、遠き所にまかりて、
 た、ん月ばかりになん、まかりかへるべきといひて、まかりくだりて、遠より遣しける。

○た、ん月とは、來月のつひたち比をいふなり。

七四四

月かへて君をはみんといひしかど日だにへだてず恋しきものを

貫之

くるれば又ノ一本

○一首の意明らかかなり。万葉十二、「月かへて君をば見んと思へかも日もかへずして恋のしげ、き。

おなじ所にみやづかへし侍て、つねに見ならしける女に、つかはしける

みつね

見六帖

七四五

いせのうみにしほやくあまの藤衣なるとはすれどあはぬ君かな

○此歌の藤衣は、喪服の事にはあらず。賤者の荒々しき衣をいふなり。藤葛カヅラの皮にて織て、今の世にも
 ふちだふとて、山賤などの着るもの二十六巻なり。万葉卷三に、「すまの海人の塩やき衣の藤ごろもま遠

にしあればいまだきなれず、とあるなどに同じ。さて上句は、なるとはいはん料の序のみなり。衣のなる、とは、古びてやはらかななる事なるを、人に馴る事にそへていへるは常なり。同じ所にありて、常に馴るとはすれど、実には逢はぬ君かなといふなり。

だいしらず

是則

七四六

わたのそこかづきてしらん君がためおもふ心のふかさくらべに
はら 家集 人しれず 六帖家集同

○深さくらべには、我思ふ心と海とのなり。続後撰恋、「いせの海にあまとならばや君こふる心のふかさかづきくらべん。かづくは水に潜入カクレイルことなり。水鳥の水に没るをもいひ、海人の海底に入て物とるをもいへり。迦豆久カヅクは、拝むマカを額衝カシツクといふ如く、水に頭を衝入ツキイルてふ二二十六ウ一語なりと、縣居翁もいはれたり。

人のをとこにて侍る人を、あひしりてつかはしける

右近

七四七

から衣かけてたのまぬ時ぞなき人のつまとはおもふものから

○我が夫ツツにはあらず、他の男ヒトツツなりとは思ひながら、物いひ初てよりは、常に心にかけて、頼まぬ時の間もなしとなり。古今恋、「よひく二にぬぎてわがぬるかり衣かけて思はぬ時の間もなし一。

人のもとにまかれりけるに、すのこにすゑて物いひけるを、すをひきあげ、むとしければ 又ノ一本れば、いたくさわぎければ、まかりかへりて、またのあしたにつかはしける
。。。。抄ナシ

○此詞書、清正集には、女房のしりたるに、物いひけるほどに、お二十七まやめきたりける人の聞つけて、ゐて入にけるあしたにと有。

七四六

あたなりし異 藤原守正よみしらず 一本
 清正集
 も
 あらかりしなみの心はつられれどすごしによせし声ぞ恋しき

○我が簾スを引あけたる時、さわぎ給ひたる、御心はつられれども、簾越コに聞たる御声は恋しく思ふよとなり。浪の砂越コに寄せたる事にそへて、簾越コに云々といへるなり。

あひしりて侍ける女の、心ならぬやうにみえ侍ければつかはしける

○心ならぬやうにとは、女の心の心得がたく、何とかやこゝろに隔あるやうなるをいふなり。俗に、ガテンノユカヌ、といふにや、近き詞なり。(二十七ウ)

後一本
 藤原後藤朝臣
 千異

七四七

いづかたに立かくれつ、みよとてかおもひぐまなくひとのなりゆく

○すべて隈クマのある所には、立かくれる、ものなれども、今君はおもひぐまなく、つれなくなりゆくは、何方に立かくれて見よとのことぞと云て、思ひやりもなく、つれなければ、長く逢見んやうもなしと云なり。思ひぐまなしとは、俗に、思ヒヤリノ無イと云意なり。古今俳諧「思ふてふ人の心のくまごとに立かくれつ、見るよしもがな。書家方集」鶯のわれてはぐ、むさくら花思ひぐまなくとくもちるかな。竹川巻「さくらゆゑ風フに心のさわぐかな思ひぐまなきはなと見るく。

をとこのこけしきろ、やうくなりければかれがたにみえ行ければ又ノ一本二十八八

○やうくは、漸々やを音便にいへるなり。俗言にソロくといふに近し。

土左佐異

七五〇

つらきをもうきをもよそに見しかども我身に近きよにこそ有けれ

○世中に憂きつらきといふ事のあるを、人の上の事のやうにおもひ居つるが、今は我身の上に、近き時節なるよなどいふなり。小町集、「我身には来にけるものをうき事は人のうへともおもひけるかな。

女に心ざしあるよしを、いひつかはしたりければ、よの中の人の心さだめなければ、たのみがたきよしをいひて待ければ抄ナシ

○此詞書又ノ一本には、女のもとに心ざしあるよしをいひにつかはしたりければ、たのみがたきよしひて待ければとあり。二十八八

在原元方

七五一

淵は瀬になりかはるよのなかはてふあすか川わたり見てこそしるべかりけれ六帖

○此歌と、次二首の贈答とは、伊勢家集に出たる方、正しかるべくおもはる。故に今も次二首を合せていふべし。

だいしらす

いせ

七五二

いとはる、身をうればはしみいつしかとあすか川をもたのむべらなりそ又ノ一本

なる 家集又ノ一本

七三

返し

贈太政大臣

あすか川せきてとゞむる物ならば淵せになるとなにかいはせん なにかいはれん 伊勢集

○此三首家集にては、四首つゞきて、仲平ノ公との贈答にて、贈太政大臣は詞書に、男の、人の許にあるにや
時平公なりとあり。彼集に、男とあるは、仲平公の事なり。人の許にとは、仲平ノ公の、時の太政大臣の聲にな三十九さりて、其所にすみ給ふをいふなるべし。かくて、初に、「飛鳥川ふちせにかはる心とはみなかみしもの人もいふめり、といふ歌あり。是彼聲になり給へるを、恨みたるなり。みなかみしものは、水上下（ミナカミシモ）を指（ミナ）上下にいひよせて、君の御心の變たるよしは、上下の人皆いふさまにて、實に又違ひもなき事の如く思はれ侍といふなり。其返し此「淵は瀬に云々にて、仲平ノ公の歌なり。一首の意は、我が心の変たるやうに、人々のいふと、いはるれとも、此度の聲にとられたる事は、我が心づからの事にはあらず。まことにさりがたき筋ありての事なり。それを他の人の口にては、いかやうにいふとも、そなたは、よく正し見てしるべき事ぞ。此方の心の底をもはからず、人のいふことなどによりて、恨みなどすべき事にはあらずとなり。又返し、伊勢なり「いとほる、云々は、さやうにはのたまひても、太政大臣の聲になり二十九ウて、他の女にあひ給ふ事は違ひはなし。然れば、我をばいとひ給ふなり。かやうに君に厭はる、我身の憂さに、よく／＼思ふに、今は何を頼にすへき事も侍らず。さて飛鳥川の淵瀬の如く、世中は変りやすき物といふ事に侍れば、其世中のかはるをにても、いつか／＼と待んかと思はれ侍るなり。もし又うれしき瀬に変わる事もあらんかと、といひて、さて其世中の変るを待つ間は、大和ノ国なる父の許へにても行て居侍らんといふを、ふくめたるなるべし。父の許に大和に行かれたる事も、家集に見えて、此時の事なり。飛鳥川は、大和ノ国なればなり。」あすか川せきてとゞむる物ならば云々。仲平公の又の彼むこになり給ふ事は、返しなり。仲平ノ公も心うく思ひ給ひ給ひたる事なる故に、其意にて、世の中の事が、人の力に任せらる、物ならば、

いかやうにもすべし(三十)れども、人の力にて及び難きは、川水のせき止められぬやうなる物なり。我か此度の事も、我心に任せらるゝ事ならば、心の変たるなどと、何しにいはるべき。さらに心変たりなどいはるゝ事はなけれども、世ノ中の事は、いかにもせん方なき事なれば、いかにもすべきやうもなしといふに、其方の大和へ行くを、止めらるゝものならばとゞむへけれど、といふをふくめ給ふなるべし。猶此贈答の事は、委しく別記にいへり。

女四のみこにおくりける 九条 興 右大臣

七五 さはにのみとしのへぬればあしたづの 拾遺 あしたづの沢べにとしはへぬれどもこゝろはくものうへにのみこそ

○初二ノ句は、我の卑とき事なり。三ノ句、年は経ぬれどもといふに、久しく心をかくる意あり。心は雲の上にのみとは、皇女の御事なればな三十り。結句のこその下に、あれといふ詞を足して、心得る意なり。すへてこそと、とらむるは、詞をいひ残して、下へ意をふくめたる物なり。古今恋四「津の国のなには思はず山城のとはに逢見ん事をのみこそ、など皆同じ。玉緒五の巻二葉に、委しく見えたり。」

返し

七五 あしたづの雲井にかゝる心あらばよをへて沢にすまずぞあらまし

○心は雲の上にのみかゝるとのたまへれど、雲の上は雲井なり。雲井は遠き所なり。其遠き他所へのみ心のかゝる人ならば、年を経て我が許へは、住給はぬ御心ならんとなり。鶴の如くよそ外へ飛行心ならば、沢に年経て住む御心はあるまじきなりといふ御意なり。此四のみこは、勤子ノ内親王と申て、延喜の皇女なり。天慶元年に右大臣師輔ノ公即此かけ歌の作者に、配せられたるよし、一代要記などに見え三十一たり。

せうそこつかはしける女の、又こと人にふみつかはすとき、て、今は思ひたえねといひおくりて侍ける返事に、遣しける 又ノ一本

○贈太政大臣のかたらひ居給ふ女の、又他の女の許へ大臣が文やり給ふよしを聞出で、もはや我をば思ひ絶給へと、いひおこせたる返事に、此歌を遣し給へるなり。

贈太政大臣

去

松山につらきながらも浪こさん事はさすがにかなしきものを

○其方の心がつらき故に、なほざりのすさびに外の女をかたらひては見るもの、今さらそなたと契し事を違へて、絶果ん事はさすがに悲しく、我はさる心にてはなきものを、心強き事をものたまふよ(三十一)となり。此歌伊勢集にては、詞書もなく、自己ミコトの歌の如し。然らば、彼大和にくだるをりに、仲平ノ公へおくられたるなどにもあるべし。又は仲平ノ公の歌にてもあらんか。今は思ひ絶ねなどいふ事は、伊勢の許より、仲平ノ公へいひやらるべき事の如くも、思はるればなり。

みやづかへし侍ける女、ほどひさしくありて、物いはんといひ侍けるに、おそくまかりければいで 又ノ一本

※つかね緒云、いせが宮づかへして侍けるを、あひしりて侍けるを、は
※多久しく有て、物いはんといひ侍けるに、おそくまかり出ければ。

○おそくまかり出とは、局より出で逢事の遅きなり。此詞書伊勢集には、この人のいもうとにおはしましける、みやす所ときこえけるは、おほんくすりのさわぎにて、なやましくなむし給ける。よひにあつまりてさぶらふに、此人のむこになりにしをときぎみの、くら人といふものして、あからさまに(三十二)まゐり給へ、ものきこえんといひけり。かへり、ことしげし、しばしといふ、ふる

ことをなんいひやりける。さればをとこ、よひの間に云々とあり。ことしげしはしはしといふふることは、下巻一に、
蝶後のことしげしはしはたでれよひの間に
おくらん露は出てはらは
んといふ御歌の事なり

枇杷左大臣

七五七 時の間に
よひの間にはやなくさめよいそのかみふりにし床も打はらふべくを六帖

○久しく逢はぬが恋しき故に、こよひ逢はんといふなれば、とかくいはずとも、早く出て逢て、此方の心をなくさめてくれよかし。久しく逢はぬ間に、旧くなりて塵のつもりし床をも、うち払ふやうにとなり。家集によりて思ふに、かの、ことしけしの御歌をいひ出したるにより給へるなれば、初句のよひの間とあるは、本歌の三ノ御句に三十三あたり、末句の打はらふべくは、本歌の出てはらはんにあたりて、よみ給へるなり。

返し

○家集には、とよみたりける女かへしとあり。

いせ

七五八 わたつみとあれにし床を今更にはらは私ん家集袖やあわとうききえ六帖家集なん

○私が床は、久しく君に訪はれたる事もなき悲しさに、流したる涙にて、海の如くになりて、荒果侍しなり。其荒果たる床を今又君に逢ふとて、袖にて払ひ侍らば、海に沫の浮く如くに、私の袖が涙にて浮くにや侍らん。さやうに思はる、故に、今出る事をも、たゆたひ侍るぞといふなり。(三十三オ)

心ざしありて、いひかはしける女のもとより、人数ならぬやうにいひ侍れば思 又ノ一女

○人数ならぬやうには、長谷雄ノ朝臣を、女のおとしめいふなり。帯木巻に、馬頭の事を、指 よろづに見だてなく、物けなきほどを見過して、人数なる世もやとまつかたは、云々といへるたくひなるべし。此朝臣の、いまだ浅官なりけん頃の事か、又はたはぶれにてもあるへし。

長谷雄朝臣

七五九

しほのまにあさりするあまもおのがよ、づからかひありとこそ思ふべらなれ

○おのがよ、の、よ、は、所帯の事にて、めい／＼の身上と云事なり。胡蝶巻に、「ませの中に根ふかくうゑし竹の子のおのがよ、にやおひわ三十三かるべき。伊勢物語二十に、おのがよ、になりなければうとくなりけり、とあるなどに同じ。一首の意は、海辺にいさりして、よそ目に見ては、むけに賤ヤツクくして、世に住むかひもなきやうに見ゆるものも、其めい／＼の身の上をば、かひありと思ひて居るやうすにて、さやうに思はる、よと云て、我も其如くなるものをと、いふ事を言外にふくめたるものなり。新古今下「しほのまに四方の浦々たづぬれど今は我身のいふかひもなし。兼盛」須磨浦にあさりする海人の大かたはかひあるよぞと思ふべらなる。中務集「あさりしてかひありけりと思ふ身をうらみてふると人々見るらん。

だいしらず

贈太政大臣

七六〇

あぢきなくなどか松山浪松山に 伊勢集こさむことをばさらに思ひはなる、(三十四才)

○波こさじと誓しことを、思ひ切て、反古ホグにしてしまうを、わけもない、どういふ事にて、其やうに思ひ

切給ふぞと、とがむるなり。あぢきなく、などか波越ス事を思ひ離る、事ぞとなり。さて此贈答も、例の仲平公とのなるべし。時平ノ公との中は、松山に波越などいふやうの事は、なかりしやうなればなり。

返し

伊勢

六一

きしもなくしほしみちなば松山をしたにて浪はもこさんとぞ思ふ

○岸もなく、潮の満たる如く、御心のあだくしくなり給へば改アウケテて誓言をやぶるといふにてはなく、上方には誓言を守るやうにても、下には誓のやぶる、にてあらんと思ひ侍となり。下にては内證にてといはんが如し。かくて此二ノ句、しほしみちなばの、しシの辞、昔より助三十四ウ辞と注し来れり。実に仮カに名づけていはんには、他に名づくへきやうもなければ、助辞といはんもあたらざるにはあらざれども、初学の輩などは、此しの字に意はなく、たゞ五文字七文字のしらべのたらはねば添へていふにて、あるもなきも、同じ事の如くにも心得誤るめり。さるみだりなる事にはあらず、是は却りて意の深くなる辞なり。俗言に訳していは、潮ガササ満マシタナラバ、といふ意にて、此し文字は、訳言の、サによくあたれり。いづれの歌なるをも、味ひ試てさとるべし。俗言にて、たとへば、雨ガフルといふと、雨ガサフルといふとの、サの辞のあると、なきとにて、意に深淺あるを以て、よく心得べし。猶委くは別記にいへり。

まもりを抄。おきて侍けるをとこの、心かはりにければ、そのまもりを三十五返しやるとて

○まもりは、肌を、とこのとちせたりけるをその男の心の守などなりと、抄にいへるが如くなるべし。猶思ふに、此守は、かはらず通はんしるしなどに、男の置たるにもあらんか。歌のさまなども、たゞ忘おきたるやうの事とは、思はれ

ざればなり。

これひらの朝臣の娘いまき

去三

よと、もになげきこりつむ身にしあればなぞやまもりのあるかひもなき

○山に山守をおく事は、木をみだりに伐はせぬためなり。我は常々なげ木をこりつむなり。さて山守のあるかひあらば、かやうに、なげきといふ木をば、こりつませぬはづなるに、山守のあるかひもなく、なげきをこらするは、いかにぞやと云て、此守は、君の通ひ給へばこそ三十五ウ此方ニにあれ、君が来給はねば、此守のあるかひもなければ、返し參らするぞとなり。此歌の下ノ句のてにをはは、なぞと疑ひて、山守の云々といふ意なり。さて、守をば、物ノ名の歌の如く、やまもりといふ中へかけていひたるものなり。よりて歌の表をば、山守の云々と心得て、守の事を表へたて、は心得べからず。なぞの辞は、末句のかひもなきにて結びたる事はさらにいふまでもなし。これを此集二の、「大かたはなぞや我名のをしからん昔の妻と人にかたらん、拾遺十七、」琴の音はなぞやかひなきたなばたのあかぬ別を引しとめねば、などの如く、なぞやとつづけて、守の云々としては、歌の表聞えざるなり。こはよく心せざれば、守といふ事に、心引かれて、心得誤ぬべき事なり。三十六オ

人の心つらくなりにければ、袖といふ人をつかひにて

○此詞書信明集には、そでといふ女つかひたる人に、其女につけてとあり。

よみ人しらず

去三

人しれぬわが物思ひの涙をほそでにつけてぞみすべかりける

○意はあきらかななり。

文などおこするをそこ、ほかざまになりぬべしとき、て

藤原真忠がいもうと

六五

山のはにかゝるおもひのたえさらば雲井ながらもあはれと思はん

○抄に、雲は山の端にかゝる物なればいひかけて、文などおこせて、猶か、づらふ事をよめり。かくか、づらはる、思ひだに絶ずは、外ぎざまままになり、雲三十九はるかに隔たるとも、あはれと思はんとなりと、あるが如し。初句は、かゝるといひ雲といはん料なり。忠見集、「はかもなくうきて見ゆれど白雲の山にもかゝる物としらずや。」

まちじりの君に、ふみつかはしたりける返事に、みつとのみありければ

○町尻は、抄に、四条の南を町尻といへり。為家、二条よりしもと云々と見えたり。契沖法師も、

二条より上は、町口、下は町尻なりといはれ、拾芥抄にも町尻二条北町東殿白蓮集家と見えたり。かくて此詞書なる、町尻の君といふは、玉葉集冬に、町尻のごといふあり。これと同人にもあらんか。

もろうちの朝臣三十七

七五

なきながす涙のいとそひぬればはかなきみづも袖ぬらしけり

○我が泣流す涙の、いよく添ふ故に、たゞ、はかなき見つとばかりの、返事にも、袖ぬらす事よとなり。見つを、水にいひよせたるなり。清濁にかゝはらでかくさまにいひなすは、藤を、淵にいひかくる類にて、

多くある事なり。

だいしらす

源たのむ

三六

夢ばかりのごとはかなき物はなかりけりなにとて人にあふとみつらん

○夢の如くはかなき物はなきよな。いかなれば、逢と見つらん。逢と見ても、実ならねば、かへりて思ひのそはるものとなり。三ノ句、なかりけりとある語勢、力ありよく味ふべし。

こ、ろざし侍ける女の、つれなきに 三十七ウ

よみ人しらす

三七

おもひねのよなく夢にあふ事をたゞかたときの間ばかり又一本ともがな

○毎夜々々、思ひ寝の夢にはあふと見るを、せめて片時のうつ、にてもあれかしといふなり。古今恋「恋わびてうちぬる中に行かよふ夢のたゞちはうつ、ならなん。同三恋「夢路にはあしもやすめずかよへどもうつ、に一目見しごとはあらず。

返し

三六

時のまのうつ、を忍ぶ心こそはかなき夢にまさらざりけれ

○逢ふといはゞ、時長くこそ逢はまほしきを、時の間のうつ、にてもなどのたまふ御心こそ、はかなき夢にも同じく、はかなき御心には侍れといひて、さるはかなき御心故に、つれなくし侍るぞとなり。三十八ウ

古今恋「うば玉のやみのうつ、はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり。新古今恋「あひ見てもかひなかりけりうば玉のはかなき夢におとるうつ、は。

だいしらず

くろぬし

三九

玉づ島ふかき入江をこぐ舟のうきたる恋も我はするかな

○上ノ句は、うきたるといはん料の序のみなり。うきたる恋とは、身も心もよる方なく定まらざるやうの意なり。さて此歌は、古今恋に、「滝つ瀬に根ざしとめぬうき草のうきたる恋も我はするかな、とあると、意は同じくて序の詞違へるのみなり。此類の歌、万葉にも多くあり。すべて歌といふものは、詞のあやにて、意はもはら同じけれども、おの／＼一首となり、又同じ意にては、詞のあやしらべのよし三十八にあしにて、まさりおとりこよなくなるものなり。こは初学の輩など、よく心得べき事なり。こは例の事のついでにいふなり。玉づしまは、紀伊国なり。海部郡と、続日本紀、第九に見え、三代実録、四十に、元慶五年十月廿二日、丁酉、紀伊ノ国、正六位上、玉出島神授^ニ從五位下^ノ、なども見えて、こはもと玉出島にて、つ文字をは、濁りてよむべきを、すみてよむは誤なり。うつは物語^物吹上に、「年をへて波のよるてふ玉のをにぬきもとめなん玉いづる島、ともありて、此次々に玉出る島とよみたる歌猶あり。

紀内親王

七〇

津のくのににはた、まくをしみこそすくもたくひの下にこがるれ

○正義に、師説云、すくもたく火とは、浦にすむ海士などは、藻屑^{モクツ}をかき三十九まあつめて焼けば、心よ

くももえずして、くゆるばかりの烟なり。さて下にこがる、と云、津の国のなにはとつゝけたるは、名にた、ん事の惜ければといふ事をいはんとて、津の国とよめるなりとあるが如し。言に出、色に顕はしなどせば人の知て名にたつべければとて心の内にてのみ、くよくと思ひこがれ居る事の、わびしきとなり。六帖「なにはがたすくもたく火のうち忍び下もえにてや世をば尽さん。

人のもとにまかりて、いれざりければ、すのこにふしあかして、かへるといひいれ侍ける

○すのこは、簀子にて、今世にいふ、様なり。帯木巻に、門近き廊のすのこだつ物にしりかけて、とばかり月を見る、など猶所々に見えたり。三十九ウ

よみびとしらず

七三

ゆめぢにもやどかす人のあらませばねざめに露ははらはざらまし

○夜べ宿かして内へ入れ給はざりし故に、簀子にふしあかして、露にぬれたるのみならず、常々通ふと見る夢路にも、宿かす人のなき故に、いつも寝覚に涙を流す事よ。宿かす人だにあらば、かく寝覚に露をば払はじ物をとなり。古今二「夢ぢにも露やおくらん夜もすがら通へる袖のひちてかわかぬ。

返し

七三

涙川ながすねざめもあるものをはらふばかりの露やなになり

異又一本

○切なる思ひの上にては、川の如くに涙をながす事も、常にある事にて侍るものを、さやうに払はれる露が、何ほどの涙にて侍るぞ。さやう四十に深からぬ御心故に、夜べも内には入れ参らせざりしといふ

なり。此贈答古今^二に、「つ、めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり、といふにこたへて、
「おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへず滝つ瀬なれば、といへるに似たるいひざまなり。

心ざしはありながら、えあはざりける人につかはしける

七三

みるめかる方ぞあふみになしときく玉もをさへやあまはかづかぬ

○抄には、近江は湖^{ミヅウミ}なれば、海松^{ムネマツ}和布^{ワフ}かる濁はなしと聞くなり。さりとも、玉藻はかづけとなり。裳うちかづきて、忍び出あへかしとなりと有て、縣居ノ翁も、玉裳は衣服の事によそへたる物なり。逢へば衣服をかづくなり。逢はぬ故に衣服さへかづかぬとの事なりと、いはれたり。此意にて委しくは、湖には、何さま海松^{ムネマツ}和布^{ワフ}はなしと聞及べ^(四十一)り。されども、同じ類の玉藻はあるべきを、それをさへ海人はかづかぬものはといひて、玉藻をかづくとは、実に逢見るといふほどの、暇はなしとも、たゞ物語するほどの、しばし忍ては出逢はるべきものをといふならんか。又思ふに、藻はかるもかくななど云て、掻きよする物なれば、かくといふ詞によりて、文の事として、逢見る事はかたくとも、文かきておこすほどの事はなるべきものを、其文の音信をさへせぬものはといふ意ならんか。下ノ句の語勢にては、文の事と見んも然るべきやうにもあるなり。

かへし

七四

なのみしてあふ事なみのしげきまにいつか玉もをあまはかづかん

○抄に、あふみとは名のみして、逢がたき障^{サバ}のみしげき内に、いかで裳^(四十一)さかづきても忍ばんとなり。

波なみ、早はやきには、藻もかづきがたきによせたるべしとあり。又かけ歌の玉藻を簾跡の事と見れば、あふといふ名のみにて、実に逢見る事はなく、人目などのしげき間に、いつのひまに、文をかき侍らんといふにてもあるべし。かくて、此贈答は、上巻二にも、下巻四にも、見えたる近江といふ女との贈答ならんか。さらでは、かけ歌の二ノ句、返しのの初句など、よしなきやうに聞ゆるなり。

こ、ろざしありて、人にいひかはし侍けるを、つれなかりければ、いひわづらひてやみにけるを、思ひ出いてしきりにいひおくりける返事に、心ならぬさまなりといへりければ

○此詞書、いひかはし侍けるをといひて、又つれなかりければ四十一といへるは、かはすてふことばそむけり。すべて此集のことばには、誤多しと縣居ノ翁のいはれたり。今思ふに、是はいひつかはしとありし、つのの字を落せるにもあるべし。心ならぬさまなりとは、一度いひやみたるを又しきりにいひやりたればなり。

七五 かづらきやくめぢの橋にあらばこそ思ふ心をなかぞらにせめ

○抄に、役ノ行者、金峯山キンポウサンと葛城カクラキとの間に、岩橋をかけんとて、諸神にかけしむるに、葛城の一言主神ヒトコトヌシノカミ、形見カタミにくしとて、昼は役せず。行者怒りて咒縛ジュバクせしによりて、橋半オカハにして止め。其橋ならぬ我中なれば、中空にしては、えやむまじきとの心なりとあるが如し。此役ノ小角が故事は、靈異記、元享釈書、金峯山縁記、袖中抄などに見えて、此集の比より四十二歌にも常に多くよみたり。撰集に見えたるはされど実には、此歌が初めなり。神の御上に、小角に咒縛せられ給ふなどいふ事、あるべきにはあらず。例の法師ばらのつくり事なり。

人のもとにつかはしける

右大臣

三七

かくれぬにすむをし鳥の声たえずなけどかひなき物にぞ有ける

○カクレヌ隠沼にすむ鴛鴦の如くといふ序歌なり。常々声絶すなけども、人にしられぬ音はかひなしとなり。

つりどの、みこにつかはしける 陽成院御製

○つりどの、みこは、一代要記に、光孝ノ皇子簡子ノ内親王、元慶八年六月賜シ姓。寛平三年十月二十九日、為三内親王、延喜十四年四月十日薨。配三陽成院、号三釣殿宮一と見えて、紹運録にも、簡子ノ内親(西十二)王のよし見えたれば、抄に綏子ノ内親王、仁和ノ皇女と見え、契沖法師も綏子ノ内親王の御事といはれたるは、ともに誤なり。但契沖法師の、釣殿ノ院は、光孝天皇の御所の名、六条の北、東洞院の東に有。これを綏子ノ内親王に、ゆづらせ給ふゆゑに、釣殿のみことは申なりと、いはれたるを思へば、たまく此内親王の御名をのみ、誤られたるさまなり。陽成院ノ帝は、神武帝より五十七代に當り百人一首うひまなびに、大御父は、清和天皇云々、御位おりさせ給ひて、二条ノ院、或は、

陽成院におはしましける故に、顕神におはしますほどには、陽成ノ太上天皇、陽成院ノ上皇、陽成帝、陽成院ノ君など、古記ともに見えたれど、たゞ今の如く、陽成院とのみ申し事なし。御諱を、某院と申す事は、後に六十三代(西十三)冷泉院より始れり。然れば、これは陽成天皇と申奉るべき事なるを、今の如くあるは、後世の俗のわざなりと、縣居ノ翁のいはれたるが如し。こは末の作者の伝などの所にいふべき事なれども、被百人首よりして、世人の多くも稱頌れるさまなれば、とくわきまへまはしくて、まづこの所に記したるなり。

三七

つくはねの峰よりおつるみななまの川恋ぞつもりて淵ぬとなりける 又ノ一本

○筑波山の峰より段々おちて来る谷水の、みなの川と云深き川になる、其如くに、我が君を恋る心がつもりくゞて、今にては深き淵の如くになりつるよとなり。みなの川の言を、落る水といひかけさせ給へるなり。筑波山、みなの川ともに常陸国なり。万葉四常陸歌、「筑波ねの伊波毛イハモとゞろにおつる水代にもたゆらに我かおもはなくて。菅家万葉「鹿しまなるつくはの山のつくゞ」と我身ひとつに恋（四十三ウ）をつみつる。

あひしりて侍ける人の、まうでこずなりてのち心にもあらず、こゑをのみきくばかりにて、又音もせず侍ればつかはしける

※つかね緒云、兼覽王をあひ知て侍けるに、まうでこずなりて候、心にもあらず、こゑをのみきくはかりにて、又音もせず侍れば、つかはしける。

○こゑをのみきくばかりにて云々は、のみとはかりと、同じ意のかさなりたるにはあらず。古今恋五「山の井のあさき心も思はぬにかけばかりのみ人の見ゆらん、などの類にて、のみは毎々イミミの意なり。いつもくよそに声をきくばかりにて、又此方へとは、おとづれもせずといふ事なり。

よみ人しらす

三七 かりがねの雲井ながらはるかにきこえしは今はかぎりの声ねにこそにぞありけるけれ 又ノ一本

○掃雁の声を遠く聞くやうに、よそに御声の聞えしは、もう限の御声今は（四十四オ）にて、聞をさめにて侍しよとなるべし。

かへし

兼覽王

七五 今はとて行かへりぬる声ならばおひ風にてもきこえまじやは

○抄に、今はかきりとての声ならば、追風の吹やるにても聞ゆまじけれど、かきりと思はねばこそ、声も聞ゆれとなり、とあるが如くなるべし。行かへるは、行かふ事にてはなく、帰る意のみなるべし。帰雁を、行くかりともいへばなり。

をとこのけしき、やうくつらげに見えければ

小町

七六 心からうきたる舟にのりそめてひと日も浪にぬれぬ日ぞなき

○抄に我心からかくうきたる人にあひそめて、日毎に袖ぬらすとな(四十四)りとあるが如し。猶いはゞ、上ノ句は俗言に、心カラ、ウハ氣ナルコトヲシ出シテといふ味ひもあるべし。

をとこの心つらく思かれにけるを、女なほざりになどか音もせぬと、いひつかはしたりければ

※つかね緒云、思ひかれて、まからずなりにける女の許より、なほざりになどか音もせぬ、といひおこせたりければ。

○なほざりには、なほざりにも同意なりと、つかね緒に見えたり。

よみ人しらす

七七 わすれなんとおもふ心のやすからばつれなき人をうらみまじやはざらまじ又ノ一本

○なほざりにもなどいひおこせたるそなたは、浅き心にて、忘んと思へば、忘れらる、事と見えたり。我もさやうにたやすく、忘れらる、ほとならば、そなたのつれなきをもうらむべしや。我は深き心にて、(四

十五才) 忘る、事の容易ケヤスからぬ故に、そなたのつれなきをも恨めしく思ひて、それ故におとつれをもせぬなるぞ、といふなるべし。古今恋四、「忘なんと思ふ心のつくからにありしよりけに物ぞ悲しき。

よひに女にあひて、かならずのちにあはんと、ちかごとをたてさせて、あしたにつかはしける

※つかね補云、よひに女にあひて、かならず後にあはんとちかごとをたてさせ侍けるにあはざりければあしたにつかはしける。

○ちかごとは、誓言なり。此詞書、あはざりければといふこと、おちたるかと契沖法師もいはれたり。

六二 ちはやぶる神ひきかけてちかひてしこともゆ、しくあらがふなゆめ

○夜宵に逢たる時は、必後にと誓言を立たるを、其誓言には違ひて、逢はざりしなり。さて今朝になりて、さやうには誓はざりしなど、(四十五) 必々アラウ争ふな。神のとがめあらん事のおそろしく、身のためにいむべき事なればとなり。ゆ、しの詞の事は、上恋二にいへり。あらがふは、争ふなり。下恋五に、「蓮葉のうへはつれなきうらにこそものあらかひはつくといふなれ。ゆめは、いましむる詞にて、万葉に多く、慎の字をかけり。古今恋三、「恋しくはしたにを思へ紫の根すりの衣いろにいづなゆめ。此歌を遠鏡に、色ニ出ステ

ズと、厭されたるにてもわきまふべし。

院のやまとに、あふぎつかはすとて

○院のやまとにとは、院に宮づかへし奉れる、大和といふ、女房の事なり。

右大臣

七三

おもひにはわれこそ入てまどはるれあやなく君やすししかるべき(四十六オ)

○其方を深く思ふ、おもひと云火の中へ我は入て、大にくるしき事よ。そなたはかく苦しき思ひはあらじ。其上に、此扇を贈れば、ふしぎに其方は、涼しくて居るならんとなり。あやなくは、此歌などの、俗言不思議に、フシギニといふに近し。

かねみちの朝臣、かれがたになりて、としこえてとぶらひてたり又一本侍ければ

○兼通のおとゞは公卿補任に、藤原ノ兼通、右大臣師輔ノ二男。天曆二年五月、左兵衛ノ佐、同四年正月、従五位ノ下、同六年正月、兼大和ノ権ノ介云々。天延二年二月、任太政大臣。貞元二年十一月薨。諡曰三忠義公。贈正一位、号三堀川ノ太政大臣ニと見えれば、此集をえらばれしころは、いまだ従五位下にておはしけるなり。然るを、四十六ウ此詞書に、兼通ノ朝臣とあるはいぶかしき事なり。四位以上の人は、某ノ朝臣とかき、五位以下は、朝臣某と書く事、万葉集古今集ともに同じければ、此集も同じ定なり。

元平のみこのむすめ

七四

あら玉のとしもこえぬる松山のなみの心はいかゞなるらむ

○末の松山を、年も越て侍れば、波の心は、いかゞ侍るにか。さだめて、もはや波も越る心にて侍らんと云て、もはや君も契を違へ給ふ御心にて侍らんといふなり。松山を波の越ゆといふ詞によりて、年も越ぬるとはいへるなり。

もとのめにかへりすむとき、をとこのもどにつかはしける

よみ人しらず (四十七卷)

七五

わがためかた興はいとゞあさくやなりぬらん野中の清水ふかさまされば

○もとより我には、深からぬ御心の、弥以て浅くなり給ふにてやあらん。かへりすみ給ふ旧キコの妻の君の方に、御心深さのまさればとなり。もとの妻にかへりすむ事を、野中の清水を汲むといふは、古今雜上に、「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ、とあるによりてなるべし。さて下恋四にも、あひすみける人、心にもあらでわかれけるが、とし月をへてもあひ見んとかきて侍ける、文を見出てつかはしける、「いにしへの野中の清水見るからにさしぐむものは涙なりけり、なども見え、又中務集に、しりたる人の、はやういきし所に、またいきけるに、「見る人の袖をあやしくぬらすかな野中の水の深きばかりに、などこれかれに多く見えたり。野中の清 (四十七卷) 水は、河内、また、播磨国などいふは誤にて、大和の布留野なるへきよし、貫之集に、「いそのかみふる野の道の草わけて清水くみには又もかへらん、などあるを引て、古今余材抄に契沖法師委しくいはれたり。すべて野外の清水を、本ノ妻の事に用ひたることを委しくいはれたり。」

女のもとにつかはしける

※つかね緒云、下野が
※許につかはしける。

源中正

七六

あふみぢをしるべなくてもみてしがな関のこなたはわびしかりけり

○近江路に、逢道をかけたたり。しるべは案内者アノイシヤ、手つゞき、などいはんが如し。近江路を、案内者はなく

ても見たき事かなと云て、手つゞきはなくても、逢はまほしき事かな、かく逢はで居るは、わひしき事なるよとなり。逢坂の関のこなたとは、いまだ逢はざるをいふなり。古今恋一、「音羽山おとに聞つ、逢坂の関のこなたに年をふるかな。(四十八)

返し

下野

夫七

道しらでやみやはしなぬあふ坂の関のこなたはうみといふなり

○三ノ句のてにをはは、何とて道しらでやみ果給はぬぞ、道しらで止果給へかしといふ意なり。やみは、止、しは為、なは畢、なんなど^{なん}のなに^{なん}に^{なん}ぬは不^{なん}なり。此てにをはの事、玉緒四の卷^{十一}二に見えたり。猶上春下七丁、「かくながらちらでよをやはつくしてぬ、といふ歌の所、又冬部^三などにいへる事をも合せ見てわきまふべし。又の一本に、やみやはしぬるとあるは、聞えざるなり。四ノ句は、抄本に、関のあなたとあるぞよろしき。こは歌の裏の意、恋の方にては、いまだ逢はざる時に、逢ひたらん後の事をいひ、表の方にては、京より近江の方をさしていへるなれば、こなたと云てはかなはず。一首の意は、か(四十八)け歌に、しるべなくても云々といへるにあたりて、道しらでとはいへるなり。道をしらで止給へかし。何とて止はし給はぬぞ。相坂の彼方^{アチラ}は、湖なりといふ事なるを云て、逢はでやみ給へかし、逢ての後は憂^ウき事ありといふなるものとたり。

女のもとにまかりたるに、はやかへりねとのみいひければ

よみ人しらず

六八 つれなきを思ひしのぶのさねかづらははてはくるをもいとふなりへらなり六帖

○抄に、しのぶのさねかづらとは、信夫山の五味子なり。つれなきを恨ずして、忍ぶほどに、果は来るをもいとふとなり。かづらは、くるといはんとてなりとあるが如し。忍ぶは堪忍タヘシふなり。新古今恋五、「よのうきも人のつらきもしのぶるに恋しきにこそ思ひわびぬれ。信夫(四十九オ)山は、陸奥国、信夫郡なり。

山里原社園など
昔多くよめり。下離別、友則がむすめの、みちの国へまかりけるに、つかはしける、藤原滋
幹が女「君をのみしのぶの里

へゆくものをあひづの山のはるけきやなぞ。かくて此歌、思ひ忍ぶのさねかづらと云て、信夫山のといふ意と見んも、詞のつゞき少しいかゞなるさまなり。思ひしのぶの山かづらともあらば、信夫山の、山かづらの意にて、つゞけたるなるべく、さねかづらのさねと云詞、さしも用なければ、もしいは写誤にやなども思へど、六帖にも、さねかづらの題に出て、今と同じければ、写誤にてはあらざるべし。さねかづらは、くるといはん料なる事は論なし。

あつよしのみこの家に、やまと、いふ人につかはしける

右典
左大旨(四十九ウ)

六九 いまさらに思ひ出じと忍ぶるを恋しきにこそ忘れわびぬれしのび
六帖

○一首の意明らかなり。思ひ出と、忘わびぬれと、忍ぶると、恋しきと、心に思ふ事を四種にいひて、あやとし給へるなり。新古今恋五、「よのうきも人のつらきも忍ぶるに恋しきにこそ思ひわびぬれ。

いひか。よ
侍りはしける女の、いまは思ひわすれねと、いひ侍ければ

紀抄
長谷雄朝臣

七六〇 我がためはみるかひもなし忘草わするばかりのこひにしあらねば

○抄に、袖中抄云、忘草は萱草也。本草図経云、令下人好^ム二歡樂^ヲ。忘中憂處上^ヲ。此歌の心は、我のためには、忘草を見るかひもなし、たとひ萱草を見ても忘らるゝほどの恋ならねばとなりとあるが如し。

忍びてかよひ。^{待り又ノ一本}ける人に。^{かな 新勅撰}藤原有好 (五十才)

七六一 あひ見てもつゝ、む思ひのわびしきは人まにのみぞねはなかれける

○一首の意明らかかなり。人まは、人のなき間なり。

ものいひ侍りけるをとこ、^{の 又一本}いひわづらひて、いかゞはせん、いなどもいひはなちてよといひ侍ければ

○男の許より、しばく、いひおこせたるを、うちやりたるやうにして、ありつる故に、いひわびて、今はいかにともせん方なし。否といひ切てなりともくれよと、いひおこせたるなり。

よみ人しらす

七五二 小山田の苗代水はたえぬとも心のいけのいひははなたじ

○我が返事をせぬ故に、君が御志は絶果給ふとも、否唯の返事は、いひ放ちはし侍らじといふを、池の槓^{イナ}を^{イナ}発つ事にていへるなり。和名 (五十才) 抄云、槓音威。淮南子云、決^テ塘^ヲ發^ツ槓^ヲ。許慎云、所^三以^三通^三陂^三竇^一。和名以比。拾遺雜記、「ともかくもいひはなたれよ池水のふかさ浅さをたれかするべき。下卷四、「池水のいひ出ることのかたければみごもりながらとしぞへにける。又卷六、「いひさしてとゞめらるる池水の波いづか

たによらんとすらん。心の池といへるは、心の水、心の滝などのたぐひなるべし。されど、池の心とは多
 くいへども、心の池といへるは、めづらしきなり。

かたがへに、人の家に、人をぐしてまかりて、かへりてつかはしける

○思ふ人を具して、方違へに行て、其所にて初て逢初たるなり。こは、此人に逢はん料に、ことさ
 らに待出たる、方違へにても(五十一)あるべし。此女といふは、もとより、他の家にありて、はや
 くより心をはかよはし居つるが、其女の家にては、逢ひがたき事あれば、方違へにかこつけて、具
 してゆきたるにてもあるべし。方違への事は、上二恋一に、委しくいへり。

七五三

千世へんとちぎりおきてしひめ松のねざしとめてし宿は忘れじ

○一首の意はよく聞えたり。宿は忘れじと云て、逢初たる人を忘れがたく思ふ意なり。宿といふに、逢初
 たる時の事をこめていへるなり。松の根に、寝をかけたるは論なし。

物いひける女に、せみのからを抄もぬけをつ、みてつかはすとて
ぬけから又ノ一本

源重光朝臣

七五四

是を見よ人もすさめぬ恋すとて音をなく虫のなれるすがたを(五十一)

○抄に、八雲御抄に、すさめぬは、めでぬなり云々。人もさしてとりあへぬ恋に、蟬のもぬけしからの如く、
 やつればてすがたを見よ。是をあはれと思へとの心に、かくよめりとあるが如し。すさめぬは、俗言に、
 賞歌モセヌ、といふ意なり。古今卷上、「山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそわれ見はやさん。同卷上」大

あらしの杜の下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし。音を鳴虫とは、則せみの事をいへるなり。上夏に、「やへむぐらしげき宿には夏むしの声より外にとふ人もなし、ともいひ、又策を、「つ、めどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり、とあるなどの類にて、一首の意、又詞書をも合せ見て、其物とさしたる事は、明らかなり。上夏、「うちはへて音を鳴くらすうつ蟬のむなしき恋も我はするかな。新勅撰卷五、(五十二)「おのれなく心からにやうつせみのはにおく露に身をくたくらん。住吉物語、「君があたりいまだずきゆくいで、見よ恋する人のなれるすがたを。

人のもとよりかへりまできてつかはしける

さかのうへのこれのり

七五

あひみてばなくさむやとぞおもひしになごりしもこそ恋しかりけれ

○逢見てば、逢見たらばなり。は文字濁るべし。逢はぬ以前には、逢見てあらば、なくさむにてやあらんと、思ひつるものを、逢見し後には、其なごりの、かへりて恋しき事よとなり。なごりとは、浜辺よせたる波の引去たるが、こ、かしこいさ、か猶残であるをいふがもとにて、たとへば山の端に入たる月日の、余光は猶しばらく残て(五十二)あるが如きをいふなり。人に別たるをりにいふも、別たる後に、猶逢たる時のさまの忘れず、或は移香などの猶留りてあるなどやうの事をいふなり。すべて波残の意にて、よく心得らる、なり。こは今俗にいふ意とは、似て異なる詞にて、初学の迷ひやすきが故に、かく委しくいふなり。しもこそそのてにをはは、玉緒五の巻四葉に、是はしもとこそと重りたる物にして、もこその上にはあらず。もこそその意とは異なり。しもその格に同じ。三の巻その部さてしもといふに、軽く却ての意をふくめり。されば、の添たるにはあら

こそ下へかへりてといふ言を、加へて見れば、歌の意明らかなり、とて此あひ見の歌又、拾遺十三、「忘れな
ん今はとはじと思ひつ、ぬる夜しもこそ夢に見えけれ、千載三、「時鳥又もやなくとまたれつ、きくよし
もこそねられざりけれ、清正集(五十三オ)、「かたみにはなくさむやとてからころもきるにしもこそぬれまさ
りけれ、など見えたり。委しくは、玉緒を見てわきまふべし。玉緒五の巻廿五に見えたる、しもその格をも
見合すれば、ことによく心傳らる、なり。かくて、此
歌のてにをはは、二ノ句のやは直なにと、うけたれば、此結びは下へは及ばず。その辭は、三ノ句にてしと
結びて切たるを、直なにににとつけて、猶下へつゞけたるなり。此格はいとく、しもこそそのこそは、
稀なる事なり。しもこそそのこそは、末句にてけれ
と結びたる事、常のこそに異なる事なし。委しくは、玉緒三の卷十二に、見えたり。

後撰和歌集卷第十一新抄(五十三ウ)

奥付

発行書林

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 通二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝明神前

岡田屋 嘉七

大阪心齋橋筋北久太郎町

河内屋喜兵衛

同 心齋橋筋安土町南江入

河内屋 和助

京都二条通衣ノ棚角

風月庄左衛門

同 麩屋町通姉小路上ル

俵屋 清兵衛

尾州名古屋本町通七丁目

永楽屋東四郎

付記 本巻の翻刻は西川祐美子さん（聖心女子大学大学院修了）の協力を得た。記して謝意を表します。

なお本翻刻の『聖心女子大学論叢』への掲載は今回で終り、巻十二以降は『文芸研究』（明治大学）に掲載します。長期にわたり本翻刻の掲載をお許し下さった論叢委員会に対し心から感謝申し上げます。また事務方で長年多々お世話になった内山知子氏にも深く感謝申し上げます。